

## 論文の内容の要旨

論文題目 出来事を超える建築：  
アルド・ロッシと戦後イタリア建築文化

氏 名 松井 健太

本研究は、1950年代半ばから1970年後半にかけて建築家アルド・ロッシが展開した建築理論を、戦後イタリア建築文化という具体的な文脈のうちに位置づけつつ、《建築の継承》という観点から一貫した仕方で理解しようとするものである。

2000年代に入ってから各種アーカイブの整備と共に大きな進展を見せているロッシ研究だが、現状では2つの問題点が指摘できる。第1に、ロッシの建築理論と建築作品があまりに安直に結び付けられた結果、理論は単なる作品についての説明へと格下げされ、ロッシの個人的なテキストとして理解されている。第2に、現在のロッシ理論の研究は、主に1950年代、1960年代、1968年前後という3つの時期に分かれて断片的に進められており、戦後イタリア全体を包含するロッシの建築理論への統一的な視点がいまだ提示されていない。それ故に各時期の研究も言説の意味を掘り下げられず、単なる資料整理や記録化にとどまっている。

これに対して本研究は、あまりに強固な前提となっているロッシの理論と作品の結びつけに対してその理論の自律的な機能を精査するために、戦略的に作品を考察の対象から外し、ロッシの建築理論を徹底して論理的に読解する。一方で戦後イタリアの時期全体におけるロッシの建築理論の展開に対して建築の継承という統一的な視点を設定することで、これまでに蓄積されてきたロッシ理論研究の知見を統合するとともに、この統一的視点に即して各時期のロッシの言説に新たな意味付けを行う。

本研究の構成は、既往研究によって確立されている、「歴史・伝統」の1950年代、「都市」の1960年代、「学校」の1968年前後というテーマ毎の時期区分を受け入れた3部構成である。ただし建築の継承という本研究独自の観点からこの3つの時期にはそれぞれ、ロッシにおいて建築の継承という問題系が成立した時期、都市を継承のモデル

として見なして議論を深めた時期、継承の具体的実践として建築教育が位置づけられた時期という意味付けが与えられている。

以下に各部とその下位の各章の概要を記す。

第1部では、1950年代のイタリア建築文化を席卷した伝統や歴史といった論点を巡るロッシの言説を追跡しながら、ロッシにおいて建築の継承という問題系がいかにかに確立していったのかを明らかにする。

第1章はロッシを含む学生たちと近代建築運動世代の間で交わされた伝統論争を検討し、この論争が単なる新旧建築の対立ではなく、建築における伝統概念の理解を巡る2つの伝統論の対立であったことを指摘する。論争の場においてロッシが展開した伝統論は、単に過去の建築文化を指示するものというよりも、これらの文化に対する態度に焦点を当てたものである。

第2章では、この伝統論争の後の数年をかけてロッシが取り組んだ新古典主義建築研究を検討し、伝統という概念が革命の時代における建築文化の把握にとってどのような寄与をもたらしているかを明らかにする。同時にこの新古典主義建築研究において、合理主義や立場の多元性、都市といったその後展開される様々なモチーフが萌芽的に提出されていることを指摘する。

第3章では、ミラノを中心とする戦後イタリア建築文化の言説空間の地勢が、ロッシら若者世代の参加によって、それまでの近代建築運動の一元的な推進からこの運動に関する多様な立場の対峙へと変質していく状況を明らかにする。そしてこうした近代建築をめぐる立場の多様化という文脈のうちに、後にロッシの鍵概念となる「傾向」という概念を位置づける。

第4章では、以上の1950年代のロッシの一連の議論の到達点として未公開論考「どのような伝統か？」を取り上げ、そこにおいて伝統と技術という2つの概念が、建築文化の継承という行為論的観点から独自の仕方で相互規定的に定義されていることを指摘する。またこれら2つの概念の再定義に伴って、合理主義の概念も新たな規定を獲得していることを明らかにする。

第2部は、1960年代に入ってからロッシが本格的に参加した戦後イタリアの一大都市論争を中心に、1966年の『都市の建築』にいたるまでのロッシの言説を追跡し、最終的にこの著作が、継承のモデルとしての都市という観点から理解されることを示す。

第5章ではまず、1950年代と1960年代でイタリア建築文化における都市像が「新次元」というキャッチフレーズのもとに大きく変化したことを指摘する。そしてこの変化に照らして、同時期にロッシが提示していた動的構造としての都市の理解や建築による新しい都市介入の在り方のアイデアを検討する。

以上のロッシの新しい都市と建築的介入の理念に基づいて第6章と第7章では、施設と住宅という2つの都市構成要素に関するロッシの言説をそれぞれ検討する。前者に関する1960年代前半のロッシの言説は主に設計競技や国際討議といった実践的な場において深められた一方で、同時期の住宅論は都市調査や歴史研究といった学問的な領野で展開されていた。

第8章では、『都市の建築』の直接的な執筆背景であるヴェネツィア建築大学「建物の配列的特徴」講座におけるロッシの教育活動を取り上げる。『都市の建築』執筆と重なる時期に展開されたこの活動こそ、同著に基本的な枠組みと明確な課題を与えたものである。ロッシを含めた講座教授陣の講義原稿の分析によって、『都市の建築』の広範な知識がヴェネツィアと同僚たちに由来すること、また「配列」講座という建築教育科目が同著の内容を大きく規定していることを明らかにする。

以上の成果を踏まえて第9章では、『都市の建築』の内容に踏み込み、この著作の徹底的な論理的読解を通して、この著作の論理構造そのものに内在する複雑さや矛盾を考察する。1960年代の都市論争を背景として都市分析と建築設計の狭間を往復する同著の両義性がポストモダニズム文化における創造的な解釈を招いた一方で、その「場所」論に現れる都市の中の二重の時間や理念的な持続幅で捉えられた都市についての議論は、1950年代のロッシの言説を展開させたものであった。

第3部では、『都市の建築』出版以降の建築教育の現場で展開されたロッシの言説を、建築の継承の実践という観点から理解する。

第10章では、1966年にロッシが教師として着任したミラノ工科大学建築学部の1968年前後の状況を概観し、同時期の建築教育制度改革とロッシの理論の相関を指摘する。同改革の肝として導入された「探求グループ」制度を通じてロッシは、固有の文化的傾向を備えたグループを形成し、他のグループとの対峙の中で学問としての建築の再建を目指していたことを明らかにする。

第11章では、こうした建築の学制的再建という目的のもとに展開されたロッシの建築設計理論を、徹底的に建築設計教育という文脈で理解することに努める。建築を作ることの合理的な説明として定義されたロッシの建築設計理論は、設計という行為をいかにして教授可能なものとするかという思考を巡って展開されており、歴史の意味や主体性の発露といった論点も、こうした教育という文脈から理解される。

第12章では、以上の学問としての建築というロッシの議論に、「1968年」という時代が与えた政治性のモチーフが考察の主題となる。とりわけ重要なのは、学問としての自律性を保ちながら建築に固有の仕方で政治性を表明する可能性である。こうした観点から「傾向」概念や社会主義都市の理念というロッシのアイデアが理解されることを示す。

第13章から第15章では、「1968年」の時代の帰結としてロッシが戦後イタリア建築文化という文脈から離反していく過程がそれぞれ、イタリア建築教育現場からの追放、異国の地スイス・チューリッヒにおける教育活動、1973年の第15回ミラノ・トリエンナーレの国際建築展示という3つの出来事に即して考察される。こうした過程の中でロッシは、徐々に自身の固有な傾向や立場の選択という行為を引き受けなくなり、様々な傾向や選択が邂逅する場を提供するという役割に徹するようになる。この事実を照らして、ロッシをリーダーとする「テンデンツァ」運動の誕生の地とされる第15回ミラノ・トリエンナーレの展示を検討することで、この運動を実際に立ち上げようとしたのはロッシではなく、彼の元教え子たちであったことを明らかにする。

最後に、以上の一連の歴史的考察の成果としてロッシの建築理論には、建築の継承というモチーフに由来する3つの特徴が見られることを指摘する。

第1の特徴は、ロッシの建築理論において、つねに歴史の転変と超歴史的持続という2つの極端な時間的様相が共存しているということである。こうした2つの時間は、合理主義概念の二重化、都市構成要素の2つのクラス、建築設計教育において教授できるものとできないものといった様々な二元論のかたちで、ロッシの建築理論に現れている。

第2の特徴は、ロッシが建築の継承というモチーフのもとに建築について語ろうとするとき、その語り方は建築物そのものや形態的特徴を対象的に規定するのではなく、そうした建築を巡る行為に焦点をあてたものとなるということである。

第3の特徴は、ロッシにとって都市という概念が、建築の継承という営みが行われる特権的な場として位置付けられているということである。都市空間においてこそ建築は過去の建築と対峙し自らもそうした伝統の一部となるとともに、伝統との関係の中で建築を設計することを教えてくれるという点で、都市は建築家にとっての学びの場所としても現れてくるのである。